

# 美術教育研究フォーラム記録

## 日時

2019年1月25日（金）14:00～17:00

## 場所

東京学芸大学 中央講義棟 C302 教室

## テーマ

美術教育とこれからの授業について考える  
～教師の問いと教科の本質をめぐって～

## 講演者 （発表順）

山崎 仁嗣（滋賀県立膳所高等学校）

「文化芸術、美術で何ができるのか」

～社会や人、自己を見つめ、考える  
多様な価値観との出会い～

水野谷 憲郎（元淑徳短期大学）

「迎角」

奥村 高明（日本体育大学）

「『進化する学力』と『美術教育の課題』」

柴田 和豊（元東京学芸大学）

「美術教育の本質をめぐって」

## 趣旨

いま美術教育においてもより深い学びが必要とされています。でもそれはどのような授業を指すのでしょうか。また、単元や課題設定を支える教科の本質とは何なのでしょう。私たちがこれからの授業を考えていくためのヒントを探る研究会を行いました。

## 山崎 仁嗣先生（滋賀県立膳所高等学校）

### 「文化芸術、美術で何ができるのか」

～社会や人、自己を見つめ、考える  
多様な価値観との出会い～

失礼いたします。滋賀県立膳所高等学校の山崎と申します、よろしくお願いたします。本日は、単元や授業をつくるために教員がどういうふうを考えているかということテーマにするということでしたので、私としましては、やっていることをそのままお伝えするのがよいかと思いついて参りました。

最近、美術の授業がいろいろなところで紹介をされております。中には、をつくってバックをする、それをどう消費者に出していくか、そのパッケージのデザインのデザイナーへの受け渡しをしていました。この経験を今も引きずっているのかもしれない。その後教員になり今は膳所高校に勤務して二三年目です。

滋賀県立膳所高等学校は、滋賀県内でトップの進学校です。生徒は結構みんな元気で、勉強も部活も、京大などの大学との連携事業にもしっかり参加して、前向きに過ごしています。

美術室は三階にありますので、グラウンドの向こうに琵琶湖があります。授業では文化、芸術と美術で何ができるのかということテーマにします。社会や人、自己を見つめ

高校の美術はどうなってるねん、もうやばいんじゃないかと、いろいろご心配を受けたりするわけで、私もその一員として責任を感じています。こういうふうに言われる原因は何かといますと、自分なりに考えるのが、これは文科省のほうのホームページからなのですが、多分、中学生は中学生、高校生には高校生の人間としての段階があります。そういう高校生に適した、高校生にしかできない、中学校の

考えるという力をつけたいと、そのために多様な価値観との出会いや、いろいろな人を巻き込んで、美術の授業をつくっていききたいと思っております。

この内容を全部はご説明できませんので、今日は特徴的なところだけお伝えしたいと思います。膳所高校は、美術Iは1年生のときに二時間の授業があるのですが、一時間の授業を週二回行います。普通、高校では二時間の授業は週一回と思いますが、本校は一時間が週二回で、ぼんぼんと来ます。2年生になると文系だけに一時間だけ授業があります。こういうところは珍しい感じがします。この一覧表にもありますが、特にこの色付きの部分が本校でやっている

美術の授業の焼き直しでもなく、大学の美術授業の内容が薄まったものでもない、高校の美術の授業内容を僕らは本当に提案できているのかと、すごく思うところです。

二十数年間教員をしているのですが、少しか自己紹介をさせていたできます。私は生まれが兵庫県で篠山鳳鳴高校、京都市立芸大を出て、そこから一年間企業にいました。デザインセクションという部署にいたのですが、今でも覚えているのが、「うちは、アーティストは要りませんよ、デザイナーでもないかもしれません。ディレクターが欲しいんです」と言われて採用になりました。こういうところに入っていつて何をしたかといえますと、企業、メーカーが商品

「連携授業」というもので、外部の美術館、博物館、学芸員、いろいろな方と連携した授業をやっています。

2年生の美術は週一時間あるのですが、この時間を「オール・ブリュットを知り、考える」と、1年生で行う授業、茶道入門の「発展版」をやっています。1年生のときはもう一つ「北大路魯山人から考える」という授業もしています。ここはざっとお伝えするのですが、その中で、全体的に共通すること、自分が考えているのは「授業の組み立て」です。まず、生徒にはいろいろな知識を得てもらい、体験を通してそれを確認してもらいます。自分がやっていることを自分で考え、自分の意見や他者の考えを共有して振り返る。この五つの

サイクル（知識 確認 考察 共有 省察）をぐるぐる回す感じになります。ですから、各授業、このカリキュラム全体、あるいは班活動なども（「確認」というところは作品をつくったり鑑賞したりすることになるかもしれませんが）、このサイクルをぐるぐる回すことによって生徒の考え方をほぐす、深めると言いますか、文化、芸術で広げていく、そういうことを目標にしたのです。それで考えを固めていき、「見方・考え方」を広げていこうという目標にしています。

1年生の茶道の様子を少しだけご紹介します。茶道の授業で一〇時間ぐらいあって、その最後のシーンで、最後にこの御茶室で生徒がデザインした御菓子屋さんをつくっていただいた（「御茶会」をします。御菓子を頂いて、「お点前」を拝見します。この上の階の教室では普段通り普通に授業をしているのですが、この場所だけ少し違った空間になります。「御茶会」は一番後に行う授業で、全てがつながる形です。そして自分で作った茶碗で抹茶を頂きます。これが高校1年生の茶道の授業の最後です。この一連の授業では、御茶だけ飲んでいくわけではなく、茶道の歴史を学芸員さんから話を聞いて、先ほどの御菓子のところは、京都の菓子司末富の山口富蔵氏の講義を聴きます。

御菓子ですが、これは何をテーマにした御菓子だと思われませんか？この御菓子、実は、「エイプリルフール」という銘がついておりまして、この右手のほうが生徒の描いたデザインです。生徒が考えたデザインを全

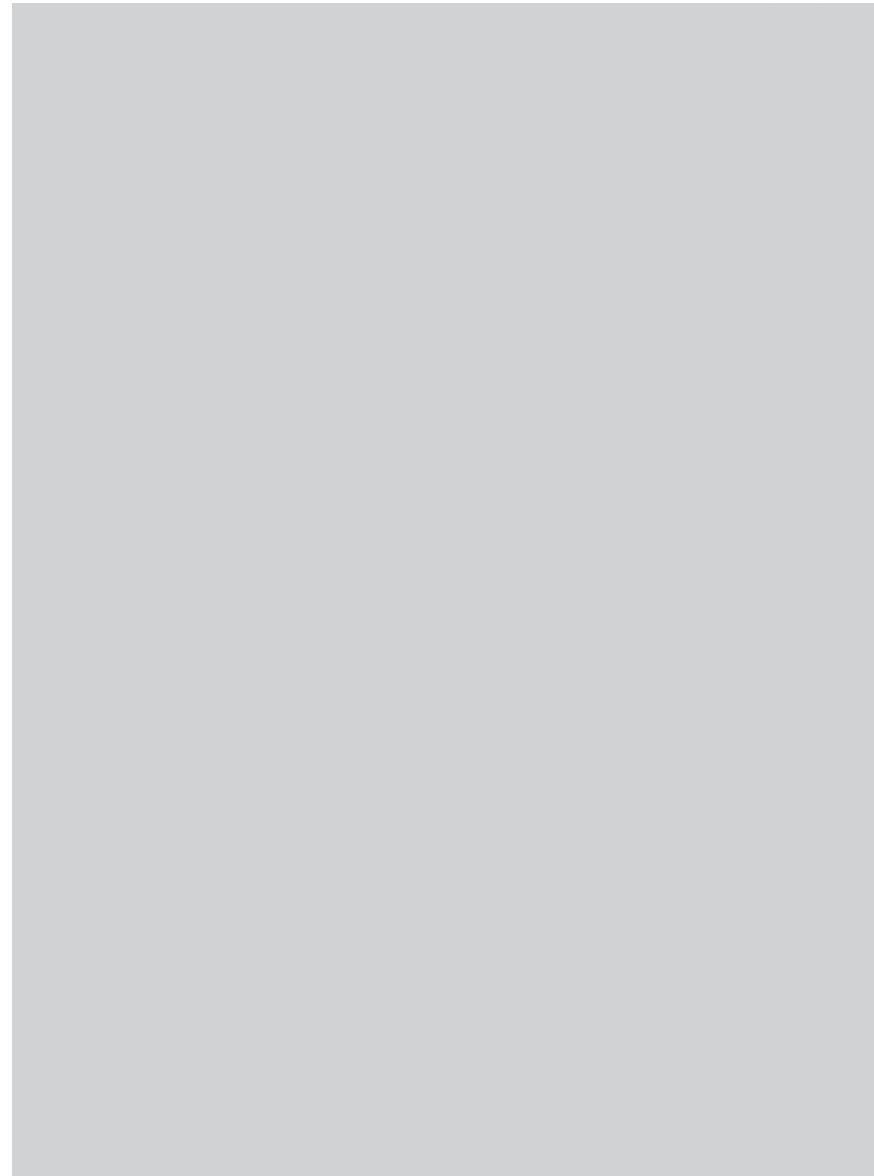


図1 膳所高校の美術の授業と班活動

図2 御茶会の様子（撮影：山崎仁嗣）



図3 御菓子 エイプリルフル (撮影：山崎仁嗣)

員分、先ほどの御菓子屋さんに持って行って、選んでくださいとお願いします。実際にどれが採用になったかというのは、

御菓子には「銘」をつけるのですが、銘というのも面白くて、これは通学帽です。通学帽に桜の花びらがびつとついているという、そこに御菓子の銘として「一步」という銘をつけます。入学式の小学生を思っって「一步」という銘をつけるのはなかなかオツだと思います。

御茶会で初めて分かるのです。左の案は、生徒が考えたデザインで、あかんべえ“をしますが、割ったら中は白い、腹黒くないということでおチがついています。そういう御菓子です。生徒がみんな頑張っって描くのですが、職人さんの目が入るので、案外、意外なものが採用になっります。

銘というと“茶碗”です。茶道の世界の御道具には、茶杓や、茶碗などに銘がついているのです。そういう銘は自分自分のためにつけるといふよりは、例えば、茶碗を誰かにあげるときに、そのあげる先の人のことを考えて銘をつけて、銘と一緒に贈るといふ、そういうところがあります。そこを何かコミュニケーションなどの授業にできると思っって、銘

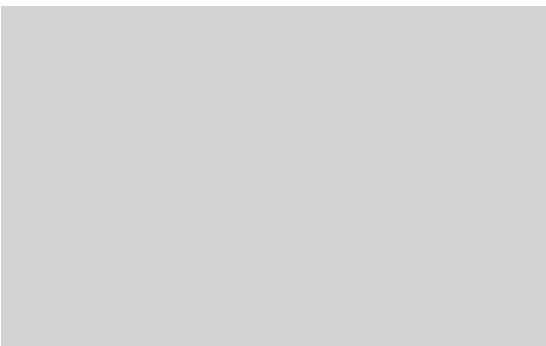
をつけ合う授業をしています。もう一つ紹介しますと、北大路魯山人という陶芸家をテーマにして学んで、器を実際に自分たちで作っって、それで料理写真家さんと呼んできて写真撮影する方法を学ぶという授業があります。家に持っって帰っって、家でその器を使い料理を盛り付け、写真撮影をしてアルバムにします。自分が作っった器が家に、家庭にあるということが、何か、日ごろどう違うのかということをもた言葉にして、後で振り返るという授業をしています。ですから、先ほどの、学んで、試して、考えて、共有して振り返るというこのサイクルを“文字”を使ってやっっていることになります。

## ■「美術Ⅱ

### アール・ブリュットを 知り、考える」

今日メインにお伝えをしようとしているのが、「アール・ブリュット」をテーマにした授業です。先ほどのものは伝統文化ですので、多分誰がどう聞いても、見ても、知らなかつたけれども、やっってみたら良かったということになるのだと思っっています。

しかしアール・ブリュットに関しては、日本では障害を持つ人のアートともいわれますが、いろいろな見方、考え方があっって、障害を持つっている人のアート、芸術活動をどう見るか、さらには、そこを通して社会を見るかというふうになると思っいます。



「アール・ブリュットを知り、考える」授業の様子より (撮影：山崎仁嗣)

これは、高校生だからできると思っます。高校生は、社会や人間の生き方に対し、自分がそこに入っってどういふふうになるかというのを考えるタイミングにあるので、このアール・ブリュットなり、こういう活動を取り巻く人々や、システム、社会を考

えていくのが意義深いし、面白いのではないかと思ってやっっています。アール・ブリュットはご存じのとおりジャン・デュビュッフェが、戦後にそのころの美術界に対して、もつといいものがあるだろう、違っだろうというところで示した概念です。それが日本に入っってきていろいろなところで展開していきました。今いろいろなところでアール・ブリュットや障害のある人の作品について話題になっていきます。ただ、それを結局私たちは一体どう見たらいいのかというところがキーだと思っっています。それを高校生と一緒に考えていこうというのがこの授業です。アドルフ・ヴェルブリヤヘンリー・ダーガーなど、いろいろな作家がい

ますが、これらを生徒に紹介します。アール・ブリュットを授業で取りあげてもいいのか、と他校の先生から言われることもあります。しかし、甲南大学の服部正先生は「アール・ブリュットを決して曲解せず、社会的提言として正しく理解することは、新しい時代の障がい者支援と社会的包摂を考えるうえで大いなるヒントとなることだろう（論文：「膝が痛い芸術家―アール・ブリュットは支援概念になり得るのか）」と述べられています。

この授業は、実は私の個人的な関わりというのがあります。昔、私は幼少のころ故郷篠山（兵庫県）で絵を習っていたのですが、写真右のこのベレー帽の方が西垣籌一という

先生で、京都のみずのき寮というところでも長年、絵画指導をされていました。私は滋賀県の教員になり、西垣先生やみずのき寮の作品を「こんな人がいはるよ、こんなんだよ」と生徒に伝えていたのです。滋賀県というのは、障害のある人の施設で戦後から造形活動をされた糸賀一雄さんがおられるように、そういうところ

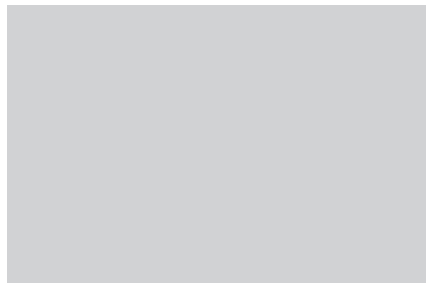


写真 西垣籌一先生 山崎仁嗣蔵

ろを大事にする県なので、これは単に「みずのきはすごいよ」と言っていたのではまずい、どうしようかと思つて、「みんなで考えよう」という授業に変えていったのです。いろいろな情報をまず収集して自分のテーマを考え（情報収集とテーマ設定三時間）、いろいろな人の話を聞いて作品を鑑賞し（関係者の講話と作品鑑賞六時間）、最後に文章化して自分の考えをまとめていく（考察七時間）、というふうに変えていきました。

その頃、私はたまたま校内の校務分掌で「総合的な学習」を担当していました。問いを立て、仮説を立て、検証したことを、まとめてディスカッションをするという活動をどんどんやっていました。アール・ブリュット

「自分」を聞きます。

それぞれ少し微妙に違うのですが、例えば、学芸員さんは、（アール・ブリュットとは）概念であり見いだされる存在だと、みずのき美術館さんはアーカイブが大事、滋賀県としてはその支援のあり方がどうなのか、研究者は結局その障害というのは、われわれがどう見るかというところにかかっているというふうに、それぞれ言われます。福祉施設支援員さんからは、障害のある人の芸術活動に出会い、それを世に紹介していったお話を聞きました。

授業と並行して、アール・ブリュットの作品を本校の図書館に二週間ほど展示をします。実物作品をボードレス・アート・ミュージアム NO-NMA

からお借りしてきて、対話型鑑賞みたいなことも授業の中でやります。実物ですから筆圧がしっかりしていて結構生々しいのですが、それを見ながらみんなでわいわいと言つてやります。そのほか、夏休みに美術館に作品を見に行ったり、タイミングが合えば作家さんと交流したりということをします。

最後に、これを論文というのか、今までは小論文の形をとっていたのですが、今年から少し変えて、エッセイでもいいというふうにして、文書にまとめさせます。そのときに役立つのがこのワークシートで、毎回同じ形でこれを出すのです。その話の感想などを書きますが、ポイントは自問自答をさせることです。こ

トの授業では最後に小論文を書くのですが、その文章はみんなばらばらなのです。日本のアール・ブリュットは、「でも、いいんじゃないの?」や、「いや、良くないじゃないの?」といういろいろなことが出てくるのですが、それはそれでいいと思っています。授業ではまず、新聞記事からいろいろ考えて、論文も読んで、生徒が、「僕はこういうテーマでやる」というのを、まず、グループでわいわいと話します。そこで、お互いにこういうテーマでやっているというのが分かります。その次に、立場の違う方々、学芸員さんや美術館ディレクター、滋賀県立近代美術館の副館長さんや大学の研究者など、いろいろな方をお招きして、それぞれの「言

の授業を受けて自分で問いと仮説、  
答えを一回一回立てなさいというこ  
とを課します。そうすると、これが

どんどんたまっていけますので、自  
分の考え方の変化がその都度分かっ  
てくることになります。仮の原稿を

輪読会で輪読して、みんなでわいわ  
い言い合って、指摘し合います。

服部正先生も言われていますが、

#### ワークシート

アール・ブリュット  
という作品なり、こ  
ういうことは、結局  
自分がどう見ている  
かというのが試され  
る、ということなの  
です。伝統文化にし  
ても、こういう障害  
がある人の作品にし  
ても、自分がそれに  
対して今までどうい  
うふうな考えを持っ  
ていて、それを自分  
で見ても確かめるとい  
う意味があると思っ

ます。

学校や教育で、いろいろ言われて  
いますが、高校生にとっての「社会  
に開く」、あるいは美術による「連携」  
というのは、高校生の美術の授業の  
可能性というか、それを裏付けてく  
れるような方向に行っている感じが  
します。

本校は大きな学校で生徒数が多い  
ですから授業で校外にあまり出られ  
ませんが、一年間にの授業に、美術  
Iでは七人ほど、美術IIでは十人ぐ  
らいの講師の先生をお招きします。  
ですから、約十五人の方々と私でチー  
ムを組んで、高校生をいろいろな美  
術、文化、芸術でその見方をほぐして、  
その中で、じゃあ、結局自分はこの  
一連の授業で何を感じて、どう変わっ

ていったかを試すという授業を膳所  
高校では、しているつもりです。

キーワードとしては「主体性」を  
育てていく、それと「構造」かと。  
構造というのは、やはり授業は、僕  
の中では一個一個の中もそうですが、  
年間を通して、一年あるいは二年、  
あるいはプラスアルファ全部を通し  
てどうだったかというところが大事  
だと思っています。そこで一つの方  
法としては、外部の人をいろいろ招  
き入れて、いろいろな価値観やいろ  
いろな考え方の人に、美術を接点と  
して生徒に会わせていく、生徒がそ  
れで目を開くといいたしうか。

それと、もう一つは、さっきの言  
語活動、つまり「言葉」の部分です。  
言葉がすごく大事だと思います。言

葉で振り返る、言葉に置き換える、  
そこに何か、悶々とした部分があっ  
て、一生懸命置き換えようとするの  
だけれども難しいのです。でも、そ  
れは結局、美術を通していろいろな  
ことを考えている、その深さをどん  
どん言葉で掘り下げていくことにな  
ると思いますので、美術だけでも  
言葉は大事だと最近強く思ってい  
ます。

あまりお伝えし切れていないかも  
しれませんが、もし何かありましたら、  
また個別でお伺いします。今日  
は本当に貴重な機会を頂きまして、  
ありがとうございます。(拍手)

# 水野谷 憲郎先生（元淑徳短期大学） 「迎角」

水野谷憲郎と申します。ここ東京学芸大学の附属小金井中学校、こちらに昭和五二年から平成八年までいて、今、出てから一一年たっております。というところで、多分昔の忘れていたことをこれから語ることになるかもしれない。あちこちつづつまの合わないことが多いのではないかと思うのですが、私が実践してきたことを基に、今日のこの美術教育研究に少しでもお役に立つことができれば、と思ってお話をさせていただきます。

ていますが、これは、果たして皆さんが使いたいものかどうかは分かりませんが、こういうものを使わなくてもいいのではないかという気はいたします。

先ほど「主体性」というお話がありました。先ほど「主体性」というお話がありました。子どもが發揮する主体性がどんなものなのか、目の前の子どもたち自身が興味を持ってこの世界を開き、どういうふうに動いていくものなのか、この辺のところを引き出すための手がかりを、私は「迎角」に求めようとしたのですが、いささかマニアックなお話を今日、これからしようと思っております。造形との出会いを探る、ということなのです。

鑑賞という世界にはいろいろな世界があるのですが、いま文科省で我

鑑賞を学校で行うということは一つの疑似体験的なものだと思います。これから子どもたちは大人になり、世界を開いていきますが、そのために必要な知恵や知識、あるいは科学知や技術というものを身に付けていきます。しかし、私などの経験でいくと、そういうものを身に付けていくその方途が、もしかすると、むしろ子どもたちの成長の邪魔をしているのでは？ということがよくあります。子ども自身がより多くのものを、より自然に身に付けていくことを、

が国の美術とされています。我が国の美術ということは、逆に言えば、わが国ではない美術と一緒に想定した世界の美術の中で、日本の美術はどうなのだろう、ヨーロッパ、アジアの美術はどうなのだろうと、地域的な広がりで見ると、こういう対象となっています。

それに対して、もう一つ、今度時間軸で見えてきますと、子どもたちが生きている今という時代に出会っているこの世界、これも子どもたちの今見ている鑑賞の対象の世界です。鑑賞という形からいって全てこれは鑑賞の対象となります。その中には、子どもたちから見るとえらく遠いものがたくさんあります、それは人間が、人類が歴史の中で生み出し

どういう場面でどういうふうに応援していったらいいのか、私はこの辺のところにもいつも気持ち遣ってききました。

私が四〇代ぐらいのときでしょうか、一生懸命彫刻などの技術などを教えようと思いました。しかし、彫刻の前に何が大事なのかといいますと、それをつくる、もつと自然な子ども必然性といったものが当たり前に必要なのです。しかし、教師としては、自分の持っているいろいろなものを先に早く伝えたいという形に、つい移行しがちです。その辺のところを変えていかなければいけないというところから、こういうことを考えてきたということをお話したいと思います。発表タイトルに「迎角」と出

てきた文化財というものです。

ところが、この文化財もその当時の人たちが、そのときに生きて、そしてつくってきたものだから、社会が変わってきたからなかなか理解できないものになっているのかもしれない。そういうものを考えていきますと、中学校の美術というのは非常に時間が少なく、限られていますので、三年程度でそれらの地域的な広がり、時間的な広がり全部押さえるというのはなかなか難しいのです。

私は少ない中で何をとり上げるかということ、二つの視点を置いてみました。子どもの現実、今、子ども自身は何を見ているのでしょうか。そこで、子ども自身が見つけた、す

てきなもの、意味があるもの、こういう次元から始まるものを「マイアートギャラリー」という実践にしました。

もう一つは、過去からずっと伝えられてきたもので、目の前に実際に見ることでできるものを見ます。ヨーロッパまで一々修学旅行で出かけるということは難しいので、今この現代に並んでいるものたちという意味では、奈良などにある日本の昔の文化財、これは目の前にできますし、大仏さんなどもすぐ見ることができません。しかし中学校でこれを子どもたちと一緒に楽しんでもらうかと思ったときに、子どもたちからは大変遠いことを感じました。

普通は仏像の役割や宗教的意味

を持たないという人たちがとても多いんです。私は、附属のうちに短大に行ったのですが、短大で一番初めの授業のときに、学生さんに、「皆さんは美術が好きですか」と、聞きました。そうしたら、嫌いだという学生ばかりでした。中学校で大嫌いになっていきます。大体五五人のうち五〇人が嫌いだと言いました。何とかその学生さんを好きにさせるのが私のテーマでした。好きになってくれませんでした。そして、好きになつた後に「美術じゃないみたい」と言いました。「これが美術なんだよ」と言いましたが、私のやったことは美術じゃないみたいと言われました。

いかに中学校が難しいところ인데大変な授業をしているのか、子ども

あるいは歴史、例えばこの時代に運慶がこういう活躍をしましたという話をします。しかし、その話というのはほとんど面白くはないんです。子どもたちはあまり興味を持ちません。クイズや何か違う形をとって、様式と写真を見比べながら、これは何時代のものなのかと当てっこクイズをやってみるといふようなこともよくやりましたが、そんなに興味を持ってもらえるものではないんです。

もつと子どもたちが、自分たちの今生きている感覚でその作品などの造形と出会っていきけるような、そういう手法はないかと考え続けました。そして、考えてみたのが先ほどの「迎角」という視点です。

## ■マイアートギャラリー



図1 マイアートギャラリー

これは、先ほど言ったマイアートギャラリーの例なのですが、子どもたち自身が今いるところから見つけるアートという意味で、子どもたちがこれはアートだと思うものを見つけてくる授業でした。簡単にこのお話をしますと、これも中学校三年間という、あつという間に過ぎてしまう時間の中で、実はその後もう美術と触れない、アートにもあまり関心

もたちが本当に好きになる過程をとりづらい難しさがあることを感じながら、もう一生美術と離れてしまう、アートとなかなか直接的に関わることに少ないという子どもたちに、(卒業後もアートへの問いを持ち続けてもらうとしたら)では、どうしたらいいのでしょうか。私は「アートって何」というテーマをぶつけました。アートとは何だろう、アートと思うものをみんなで探してきて紹介しようと言いました。ポスターみたいに自分の紹介したいものを紹介して、それを一年間貼っておくのです。途中で子どもたち同士がその作品について、これはアートだと思うか思わないかという意見を交換し合います。そして、最後に自分の考えをもう一

回まとめてみてそれを発表し合うという、こういう形をとりました。子どもからはいろいろなものが出てきました。最初のころに、「高橋尚子はアート」ということが出てきて驚きました。高橋尚子はみんなに感動を与えたからアートであるという意見や、スポーツ選手であるからアートではないという議論があり、なかなか面白かったのです。他にも猫のひたいだとかいろいろなものも出てきました。発展した議題としては、雲の写真を撮ってきた生徒がいて、雲はアートだとその子が言いましたら、周りの子どもたちが「それは自然がつくったからアートではない」といいました。そうしたら、その子は答えました。「自然の雲の美しさを写



ていると思いました。

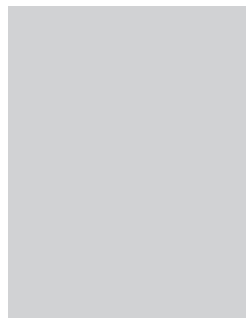


図2  
マイアートギャラリー

## ■ 修学旅行

こんなことをやる一方で、過去のものをどう見るかということですが、ここ（マイアートギャラリー）にもいろいろな過去のもので出てきまして、仏像は出てきません、ほとんどが絵です。それから、廃屋など、いろいろな人間のつくったものや何かが変化していくものに目を向けるなどの、そういう感覚はよく出てい

ました。

ところが、仏像や襖絵などはなかなか出てきません。やつと出てきたのは光琳と俵屋宗達です、なかなか出てこないんです。奈良美智などは出てきます。これは子どもたちの今接している世界、もつと言いますと、子どもたちは、現代は非常によく見えています、遡れば遡るほど難しい、立体物・仏像は非常に遠いのです。そこで、この遠いものも当時の人たちは大変興味を持ってとても大事にしてつくっていたのですが、この辺のところがどう接することが出来るか、これはなかなか難しい問題かと思いました。

そこで、修学旅行を利用してきました。「人と文化」というテーマで、います。」という言い方をしています。多分そういうところに触れると子どもたちも分かるのかと思います。これはある子どもにも修学旅行の帰りの列車の中で書いてもらった感想です。

「実際に行くまではよく分からないことがたくさんありました。頭では理解していても応用がきかないとか。何手先？と聞かれてもへ？だった。でも、二・三つの塔や建物を見ているうちに一発で分かるようになりました。そして、そのうち、疑問がどんどんわいてきました。あまり分かんずに見ているよりも、分かっているほうが疑問がわくのです。これはお寺を見るときだけじゃなくて、他のことにも使えそうです。」

真で切り取ったのは僕だ、だから僕がアーティストだ」と。子どもたちは拍手をしました。そういう議論がなかなか面白いのです。金正日はアートかということも議論しました。金正日は政治家であって権力を持っていると、あの権力で人を処罰したりするというのはアートじゃないとみんなは言いました。そして、その子が、壁紙に貼って、アンディ・ウォーホルのように並べてしまえば、これはアートじゃないかと、だから、そういうふうにはアートになり得るのだと反論しました。ここでは権力がなくなればアートになりうる、権力が発揮できない壁紙になってしまえばアートなのだった議論がありました。アートの本質をめぐって述べ

国語科、社会科、美術科が中心になってやっていたのですが、文化遺産について、これは美術的、あるいは文学的、社会的な視点からちゃんと理解を深めていこうということなのですが、これは話で終わってしまいやすいのだと思います。つまり、美術で歴史の説明をしても、宗教的な役割を説明しても、それでは美術そのものの魅力に出会わせるという形にはならないと思いました。そこで、先ほどご紹介した「迎角」をとりいれたら多くの生徒が興味を持ってくれました。一六〇人近くの生徒がいるのですが、仏像や寺院建築に以前から興味がありましたかという質問に対して、二〇%ぐらいしか興味を持っていないという反応でした

こんな気づきが子どもたちの中から出てきます。鑑賞というのが国語教育なのか、社会科学教育なのか、美術教育なのかという区分けをするこゝと以上に、こういう関連性を持つて一緒に学んでいくことのほうの意味はあるのではないかと思っています。

これは「迎角」の授業の実際の場面です。唐招提寺の前で、みんなと一緒に屋根を見ようと、屋根を体験しようということになりました。どうやって体験するのかといいますと、南大門の前にずらっと一斉に横に並びまして、屋根の反りの先端だけ、軒先だけを見て真っすぐ歩くのです。見ているとだんだん屋根が舞い上がってといいますか、だん



図3 授業場面 (水野谷憲一郎)

だん薄くなっていくのです。近づいていくとどんどん高くなりまして、とうとう一斉に線になるのです。線になったところでみんなストップして、「ここから先へ行くと屋根の裏側しか見えないよね」という話を確認した上で、横を見るのです。すると、何かあるのです。何だと思えますか？

—— 灯籠があるのです。これは新薬です。回りを塗るなどさせますと、これは壊れます。西洋美術館にやたらに大きなロマン主義の絵があるのですが、斜めから見ると足がちぎれます。この（三歳の子供の）絵は壊れません。これもある意味では、造形というのが一つの、人間の目との関係性（迎角）で生まれているという一つの一つの証かと思えます。三歳の子はすばらしいです。

## ■迎角

「迎角」は航空機の翼が、風を受ける角度を迎角と言うのです。これを使い「視線」を受ける形の傾斜を「迎角」というふうに捉えました。だから、形がそういう傾斜をもつこと、つま

師寺も同じです。薬師寺のあの一重目の屋根の反りは、やはり同じです。そういうところを一緒に学んで経験しますと、「面白い」というようなことが子どもたちの中に出てきます。灯籠の辺りのところで背の高さの違いがあるので、多少一、二歩前後がありますが、大体当たってきます。そこから内側はもう屋根の内側の世界、一つの外と内の結界みたいなところなんです。天龍寺というところで昔は昼食を食べていたのですが、食べていると、後ろに目を感じるの、ひよつと見てみると龍がいるのです。食べ終わった後に子どもたちを少し引っぱり出して一緒に歩いてみると、龍が追いかけてきます。こんなことを一緒に確かめてみます

り子どもたちの目、人の目にうまく傾きがあうと、それなりの形が見えてくるということなのです。

東寺に行きまして、子どもたちに像の側面を見せます。見ていただくのと分かるのですが、前に立っているのが真ん中にある持国天と増長天、両端は、こちらが多聞天で向こうが広目天なのですが、多聞天と広目天は後ろへ倒れていますでしょうか？

真ん中の二つは内側に、前に倒れているでしょうか？これは子どもたちに、何で倒れているのかと聞きますと、「ああ、変だ」といつてすぐ興味を持ちます。その変だと思った子どもが、その講堂の中のお店みたいなところのおじさんに、これは倒れていますか何で倒れているのですかと

聞いたなら、うちの仏像が倒れているわけないだろうと怒られて帰ってきた、しょぼんとしていたのです。私  
が、「それが答えなんだ。倒れていないだけ倒れているんだよ。側面から見たら倒れているんだ、前から見たら倒れていないんだよ」と、なぜ、どうしてそうなっているのだろうという話をしました。これは完全に倒れているのです、倒れないように立つのは物理的にも大変ですので、下のほうを見るとブロックでちゃんと支えています。大変な努力をして倒れています。これが空海の構想した一つの意図です。では、なぜ倒さなければいけなかったのか、これは、重心は全部外れています。これは広目天ですが全部重心が外れています。

実は原理は簡単なことで、前から見たときに、近くにある高い像は前に倒さなかったら目と目が合わないのです。遠くにあるものがそうやって前に倒れていたら手前に（像の目の向きは）落ちてしまいます。だから、後ろへ倒さないと駄目なのです。そう、これは当たり前原理なのですが、言われてみると、「ああ」というようなことが多くて、子どもたちも大変興味を持ちます。

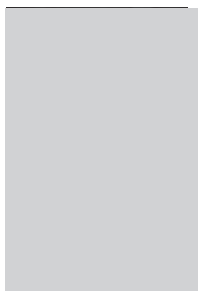


図4 前に傾く像の例  
写真は東大寺大仏殿  
多聞天

これは白山比咩神社というところから発見された十一面観音なのですが、後ろへ反っくり返っています。

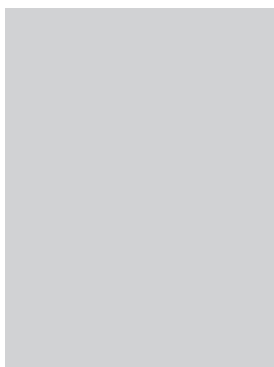


図5 石像

それから、これは斜め、左右の幅が正面から見ると違います。これは佐渡の国分寺で見つけた像なのですが、この像は斜め下から見ると

置かれています。そうすると、ちゃんと左右が整うようになっていきます。阿修羅さんも実は倒れています。倒れていますから、この角度を使って、じゃあ、もともとどこに立っていたのだろうというのを子どもたちと探します。そうすると、傾斜に合わせていきますと、これは後ろへ倒れて



図6 石像の左右比

いるのですから、先ほどの原理でいくと、前か後ろかという後ろです。そして、左右どちらかという、右足のほうに重心がかかっていますので、これは向かって左側に立っているのではないかという想定が立ちます。実際に計算をしてみますと、このぐらいの距離の間隔で立っていたのではないかと、これを子どもたちと探していきますと、6mぐらい離れたところに立っていたのではないのでしょうか。実際に興福寺に西金堂の曼荼羅図があるのですが、まさに正面から左側奥に阿修羅が描かれています。大体想定と当たるのではないかと、こんなことをやって遊んでいくのです。子どもたちと、実際に当時の作者たちが何を意図している

あぐらをかいて後ろへ倒れています。垂直にちゃんと直角に座っていますせん。これはなぜかといいますと、掛け仏ですから下から拝むようになっているのです。すなわち、どんなことになっているかといいますと、こういうふうにならばいいと思います。

のかと、そこを探っていく、こういう体感的に子どもたちの鑑賞を広げていく一つの手がかりになるかと思っています。

このことは現代アートも同じです。ジエーム・ズ・タレルさんの作品（「オーブン・スカイ」ベネッセアートサイト直島他）もそういうことで、ある地点に立つとその世界が見える、このある地点に立つというところを探していくというところに、子どもたちと一緒に楽しんでいく道が一つあると、このように思っています。簡単なお話で、どうも失礼します。

（拍手）

# 奥村 高明先生（日本体育大学） 「進化する学力」と「美術教育の課題」

皆さん、こんにちは。還暦になりまして最近思うことは、「自分の分かったこと」はもう時代遅れということ。私は日本体育大学にいます。私が、山口香さんが『巨人の星』に感動した世代は指導や組織の要職から外れるべき、これからは『キャプテン翼』で育った世代が活躍しないといけないとおっしゃいました。私も外れる世代になってきたと思います。

先ほど、すごく分かりやすい図が出てきましたが、私の話は多分その

周辺や、少し広がったような話になるので、果たして役に立てるかどうかは分かりませんが、始めたいと思います。

今日は、五分ぐらいずつ三つのお話をしようと思います。ひとつは美術は時代や社会とともにあるということ、二つ目に学力は進化するということ、最後に子どもは新しい意味や価値をつくり出すので、ポイントになるのはエビデンスや、教師力や、資質・能力だろうという話をします。

## ■美術は 時代や社会と共にある

まず、美術は時代や社会と共にあるということなのですが、これは何か分かりますか。これは有名な大会の写真なのです。誰でも知っています。スウェーデン、ジャパン、そう、これはオリンピックです。ご存じの方もいると思いますけれども、一九一二年〜一九四八年の間はオリンピックに「芸術競技」というのがありました。考えてみれば、われわれはもう大昔からスポーツの彫刻をつくったり、美しい神殿や競技場をつくったりしているわけです。よく、美術は人間だけがつくり出したみたいなことを言う人がいますが、この

サークルは誰がつくったか分かりますか？アマミホシゾラフグというフグです。うまくつくらないと結婚できないのです（笑）。ニワシドリはこのような遠近法まで使います。これはバーバラ・ヘップワースの作品ですが、そっくりですね（笑）。

美しさを感じる感性とつくり出す知性という人間目線の言葉でいいますと、それらは何十億年もかけて生き物に与えられてきているわけです。

そこからわれわれ人間は美術というものをつくり出し、社会や文化などに関わりながら、人々の見方や考え方を育ててきたわけです。ただ、あまり自覚はされていなくて、有用性などは不鮮明なままで、いまでも美術だけに通じる言葉で語っているの

はないかというところが反省点や問題意識としてあるべきだろうと私は思います。そういう歴史を経てきて、現代では、AIが自画像を描く時代になってきました。これが、AIが描いた自画像（「エドモンド・デ・ペラミー」）です。約五千万円で売れました。これはAIのつくった絵なのか、人間の文化がつくり出した肖像画なのか。多分区別がつく人は誰もいないと思います。

もう一つ、二〇二〇年に5G（第五世代移動通信システム）というのが来ますけれども、どういうことが起きるかといえますと、自動運転や遠隔医療、農業なども何かも変わってしまいうらしいです。これが5Gの画面です。NTTの最上階にあ

り、行ってきましたが、品川の画像も品川がもうそこにあるようにしか見えないです。大容量高速、低遅延で行われますので、こういうことが実現できてしまいます。それでサッカーも見ましたが目の前で選手権が行われているような感じでした。

人は道具と一体化して、共に考えて知覚するという性質があります。皆さん、この343×822という計算を今すぐ、何も使わずにやってください。誰もできないのです。ところが、紙と鉛筆と筆算と数字と文字という道具を使ったらできるのです。つまり人間は道具がない限り何も考えられないのです。道具の進化は身体認知と変化を起こします。たとえば、かつて別々の機器がそれぞれ担って

いたさまざまな機能が時代の変化によって全部スマホ一つでまとまるようになりました。またもつとその次の時代が恐らくやつてくるのでしよう、かつて iPhone があつたという時代がくると思います。たぶん、このように人前で話をしていても、突然立体画像の孫から話し掛けられるという時代になるのでしょう。中国 IT 大手・百度（バイドゥ）の社長もスマートフォンは二〇年以内に消えると言っています。美術館も今はギャラリートークをしたり、オーディオガイドをつけたりしていますが、多分スマートグラスになって、スマートスピーカーで複数の人々と対話するようになるのでしょうか、という話をしていたら、すでにそういう機能

三分の一角が企業関係の仕事になってしまいました。最近ではアフラック（Allac 保険会社）から、美術教育の話聞かせてくれと呼び出されています。

これが一番良質な本であると思うですが、ニール・ヒンディの「世界のビジネスリーダーがいまアートから学んでいること（二〇一八）」の中では、企業が期待するアートの効果として「様々な角度から物事を観察し、解釈する、無関係と思われるものを結び付ける、新しい視点やアイデアを生み出す、人と異なる発想をしようとする態度、新たな意味や価値をつくりだし、それを社会に発信する」ことであると述べられています。これを読んだときに、

を持ったメガネが出ていました。

そのような状況の中で、企業はビジネスモデルが一瞬にして崩れて、急速に業界再編が進むところに置かれていくわけです。産業が次々と姿を変え、一〇年前には想像しなかつた世界が一〇年後は生まれています。オズボーン (Michael A Osborne) によると、二〇三三年までにアメリカ人の四七%がコンピュータ化される職業について AI 技術の独占が起こつて持つものと持たざるもの差が生まれるとされます。

そのような状況の中で、アートの企業が期待するという時代がやつてきてしまったということでしょう。企業とアートの関係は海外のアートメディアやビジネスメディアで頻繁

「えっ?」と思つて、これは全部先生方が図工の授業で実現しようとしていることじゃないかと思ひました。でも、企業はそういう期待をしているのでしよう。パリのアーティスト

集団があまりの列車の混雑に腹を立てて、車両に干し草を放り込んで「われわれは牛じゃない」と言ったのだそうですが、全く関係ないものをぼんと結び付けるといふ、そういう発想などを必要としているのかもしれない。多分科学者もビジネスマンも知的な能力は変わらないわけです。より成功するためには何か創造的な思考が必要だから、「じゃあ、アートじゃないか」という時代が、もしかして来ているのかもしれない。

に取り上げられています。たとえば、オックスフォードのミュージアムがシリア・イラク難民をツアーガイドやコミュニケーターとして育成しているのだそうです。

以前に企業がアートスクールに派遣していますという話を含めて「エグゼクティブは美術館に集う」という美術鑑賞教育の本を二〇一五年に出しました。二〇一七年には「世界のエリートはなぜ『美意識』を鍛えるのか（山口周著）」というビジネス本が出て、大ベストセラーです。二〇一八年の九月から一〇月だけで九冊の「ビジネスと美術」に関する本が出ています。

何より私自身、「美術教育とビジネス」に関する講演依頼が増えて今

## ■学力は進化する

### 学力観ではなく

### 学力変化が進行している

次に学力は進化するというお話なのです。学力観じゃないです、学力そのものが変化しています。まず、三〇年前の人よりも知能がどんどん上がっているということです。これはフリン (James Flynn) という人が証明しています。「フリン効果」と呼ばれています。人間は分類、仮定、推論などを駆使し、概念的知識を探り、問題解決する能力が高くなり、認知機能的に進化しているとされます。そして大体一〇年で三ポイントぐらいい知能指数、知能検査のデータが、どこの国も上がるのです。だから、

私が当時小学校のころは一五〇の天才だったとしても、今の子どもに混ざると一三〇程度になってしまいます。

TV・映画・写真などの視覚文化の発達、電車やパソコンなどの道具の進化、栄養の改善、経済の発展・グローバル化、教育の発展などが原因です。この現象をフリンは「社会的にだんだん学力は上がる、スキルは向上するということです。われわれの身近な例で、東松照明が一九七二年に離島の人々を撮影したときこのような話をしています（『太陽の鉛筆』一九七五）に、その記述をしています。被写体のおばあちゃんを撮って、その後「おばあちゃん

査を受けた子供たちは今年の新規採用職員となっています。

彼らが、どんなセンター試験を受けてきたかといいますがもう単純な知識では解けない問題です。たとえばこの日本史の問題は四つ、この中から正しいものを二つ取り出せというテストです。「やるな、センター試験」と思いました。

こちらは地理B、二〇一八年のもので、問題の主人公はノルウェー、スウェーデン、フィンランドと旅行にいった、日本文化とつながるものを見つけてます。『ニルスの不ふしぎな旅』  
「スウェーデンです。その下にフィンランドとノルウェーを表している図や言語が掲載され、正しい組み合わせは何かというものです。『巨人の

ん、これが写真ですよ」と渡します。すると、「うーん」ともじもじしながらじっと見ているので、変だと思っ

て後ろに回ったら横にして見ていたそうです。  
一八八〇年代生まれの人に写真やテレビやパソコンなく、栄養、経済、教育は現在の水準にはないということとです。その結果、写真を読むという能力が身につかないわけです。昔は学校なんてなかったのですが、工業化され、全員同じ年齢で同じ仕事をしなければならぬ社会になると、学校という制度が必要になります。

学校というのは、工場と産業化のために生まれた認知進化のシステムです。学校のない時代とは違う学力をわれわれは今、身に付けているわ

星』で育った世代は、「いや、これは『ムーミン』を知っていると楽だろう」とか「いや、『ムーミン』は厳密にいうと幻想の国だからフィンランドとは言えない」などと、わざわざ大使館にまで電話したそうなのです。そんなことを知らなくてもこの問題は

解けます。与えられた情報から必要な地理的情報を取り出せばよいだけなのです。高校や塾の現場は全然騒ぎませんでした。事実的な知識だけで子供たちが解いているのではないという、そういうことを分かっていたのでしょ。

こちらは平成三〇年度、一週間前にあったリスニングです。「We need an idea for a new cartoon character.」ということ、一方的にしゃべら

けです。工業改善の時代に必要な学力はうちの父のような学力でしょう。父は一人で小屋が建てられました、私には無理です。

私が具体的に学力の変化を実感したのは文部科学省の二〇〇七年（第一回全国学力・学習状況調査小学校国語A問題）です。「ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっぱいしげった森の中にあなをほって住んでいました。」というのは、体系的要因と、環境的要因の二つがないとできない問題なのです。この問題は正しい答えを導き出すのではなくて「根拠を持って考える能力」が必要ですよというメッセージなのですが、それが出されて一〇年少したち、二〇〇七年第一回学力・学習状況調

れるあのリスニングです。「I agree. How about a vegetable?」「That sounds OK. But, for a stronger impact, give it wings to fly.」「Good idea.」さあ、ではそのキャラクターのイラストはどれでしょう（笑）。

センター試験は暴走していると思いますが、答えは二です。リスニング試験であっても瞬時に英語的な情報を取り出して組み合わせなければならないのです。将来的には駐車場の使用契約書を読んでトラブルの原因を探れ、などという問題を、今の中高生は受けるようになるのだそうです。

## ■学力の変化を 実感した事例 漫画

学力の変化を実感した事例の二つ目は漫画です。これは私が実感しました。これは父親が読んでいた漫画です。見てください、真ん中にずつと「のらくろ」がいて、右、左の位置関係が変わらず紙芝居のように展開するわけです。親父はこれを読んでいた。そして、私が読んでいたのは、「鉄人28号」です。クローズアップなどの映画的手法が使われています。これをパラパラ読んでいたらのらくろ世代から、「本当におまえ、読んでいるの？」と、よく言われました。つまり、親父にはこれが読めなかったのです。ところが「ワ



図2 ※学び!と美術 <Vol.76>  
子どもの絵の見方 ~田川凶画  
展の実践から~ <https://www.nichibun-g.co.jp/data/web-magazine/manabito/art/art076/>

を折って歩いていきます。滝や橋などを、上から見たかのように、全部立体的に描いています。まるで、ドローンで見たかのように。ピアジェが、幼児はメタ認知ができないと言いましたが、もうあてはまらなくなっているのかもしれない。私の子どもころなどは、クジラが魚を食べますというイメージは平面の絵程度でしたが、今の子どもたちは上下左右様々な方向から撮影された映像を見

ンピース」では私が読めなくなりました。どこにルフィがいるのですか。どこに大佐がいるのですか、右、左はどうなっているのですか、もうさっぱり今の漫画は読めないのです。漫画は、映画の表現から3Dの表現に変わったのです。

## ■今の子供は相当 私たちと違う世界にいる

今の子供は相当私たちと違うところにいます。頭の中に3Dやドローンがあります、認知的な進化を続けています。かなり多様な価値観を持っています。幼児期から、複数の話が交錯し、誰が悪者で誰がいいやつかさっぱり分からない仮面ライダーを

ています。もう私の孫と、私では根本的に違ってきているのでしょうか。

## ■子供は新しい意味や 価値をつくり出す エビデンス 教師力 子供の資質や能力

子供は新しい意味や価値をつくり出すという話です。当たり前ですが、子どもというのはみんな、訳が分からない、なぜ?という不思議な世界にいますので、必死に自分で新しい意味や価値をどんどんつくり出していきる生き物です。左という漢字を子どもは「右(反転で)」と書くわけです(笑)。考え方、つまり、概念は合っています。

見ているのです。さて、動物会議といいますが、未来の世界を表す方法の定番なのですが、この作品では、昆布も、クリオネも、ミジンコも動物なのです。動物や環境という考え方がもう曼荼羅のように広がっているのです。これは小学校4年、これが中学生です。私には描けないと思いました。

私が幼稚園生のころに描いていた絵はこれです。四歳七カ月で階段を描くことに成功し、家は立体的に描き、遠近法も使いましたが、それは、『鉄腕アトム』や『ビッグX』のアニメをたくさん見ていたせい입니다。でも、全部映画なのです、画面なのです。今年のある展覧会で見た幼稚園生の絵です。遠足で、自分や先生が膝

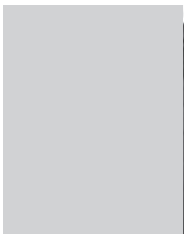


図3 奥村実践  
立てて、立てて

これは、私が30年前にやった小学4年生の授業です。低学年の「ならべて、ならべて」を発展させた造形遊び、中学年版「立てて、立てて」です。この子たちは、ヒマワリの支柱を穴に山ほど突っ込むのです。何か草月流みたいになつたから「何だ、君たちはこの空間が面白いのか」と聞きますと、「先生、ここが面白いんだ」と言つて、突き刺したところを指さします。あまり意味は分かりませんでした。でも二〇一七年一月にフィンランドのヘルシンキ市立現代美術館、若手作家の作品展を鑑賞

したのですが、まったくそっくりな作品がありました。なるほど、作家と子供は、自分なりに意味をつくり出すという、価値をつくり出すというところで共通しているのでしょう。

さて、これからどうなっていくのでしょうか。恐らく、図画工作・美術で学んだ学力を妥当性のある証拠エビデンスで明確に示すこと、教師力や資質・能力というところが問題になっていくでしょう。まずはエビデンス、それによって何が証明されてきたかといいますと、教師力が大事だということは証明されています。ジョン・ハッティ (John Hattie) は八〇〇のメタ分析をさらにメタ分析した結果、全ての教育施策の効果を平均化すると0.4でした。すべての

供たちは永続的にずっと続く謎にはたどり着いているのでしょうか。授業は、本質的な問いに向かって進む探究活動という言い方をできるかもしれませんが、それ以上に、本質的な問いとそうでない問いがあるというよりも、進化する問いのありようそのものが学びだと言えるのではないのでしょうか。

水野谷先生のマイアートギャラリーもすごい教師力だと思います。恐らく、この実践は二〇年早いですが、こういう実践が、これからどんどん出てくるのだらうと思います。たとえば、「花札」展。この生徒作品は私これが美術だと思ってしまう。札の絵柄について解説をつけているわけです。「すすきに月」の解説を大人

施策には学力を上昇させる効果がありマイナスにならないようです。でも、宿題は0.29、学級規模の縮小は0.21、能力別学級は0.12、異年齢学級に至っては0.04、要はあまり効果がない。一方、平均を大きく超えるものは、教員要素が多いのです。教師の明瞭さ0.15、教師と子どもの関係0.72、現職教育の効果0.62(教師の学習を変える傾向0.90、教師の行動の変化0.60、学習者の影響0.37)などです。この研修会もその一つだといえます。また、熟達教師こそが学びの違いを生むそうで、熟達した教師によって生徒は深層的な理解に到達するということです。

図工・美術を通して、他の教科の学力が伸びたという例もたくさんあります。月が正中線からずれています。月に考えさせますと、たいてい「ススキ、月が出てきた、赤が斬新」とか言うのですが、中2の生徒が考えた解説は「稜線の弧と月が接さんばかりに近づいているので、山の向こうから月が上がってきた感じがよく出ています。月は正中線からずれています。あえてずらすことで動きが感じられます。」実に論理的で創造的です。それを引き出す教師力があるということでしょう。

これからは伸ばしたい資質、能力から授業を組み立てること、何ができるようになったかを子供自身が自覚できること、研究大会を少しだけ実証的にすること、そしてカリキュラム・マネジメント、学習評価の見直しなどが重要なポイントになるで

ります。恐らく、図工や美術は、すべて正解といえる状況の中から必要なものを取り出して創造的に組み立てない限り一つの作品も出来上がりませんので、恐らくそういう能力が学力テストに影響しているのでしょうか。それを指導する教師力や学校力もあがるのかもしれませんが。

本日ご登壇の山崎先生も、主体的な学び、対話的な学び、問いが深まる学びを実現しています。教師は名人というよりはコーディネーターで、学習を通して膳所高校の生徒の問いは事実に知識の問い、概念的な理解の問い、本質的な理解の問いというふうに進化していきました。そして、この授業を終えて解答にはたどり着いていないのですが、恐らく子



図4 奥村実践 春の色

しょう。

最後の話題です。これは私が小学校5〜6年生を受け持ったときの、「春の色」という題材です。造形遊びのような、絵のようなものなのですが、「宮崎は若葉色って一〜二週間しか持たないんだよ。あの色が先生は好きだね、そんな春の色を探してみないか」と言うと、いろいろな色を探した子供たちがいました。

この子は、イラストポर्टにティッ



シユで若葉色を塗りました。次に、そのイラストボードの上の部分だけピリツと剥いだのです。そして全部鳥の形に切り取りました。そして画用紙の上に綺麗な形で並べます。ここで私のいやらしい美術の虫が働いて「いいねそれ、ちよつとのりで貼つたら？」などと仰いましたら、ぐしゃつと壊して、今度は斜めにグラデーションできれいに並べました。「おお、いいな」と、私はまた寄っていつて、「そろそろ貼るのかな」と言くと、子供はまたぐしゃつと壊しました(笑)。そのうちに「先生、針金刺すのです。「あく終わった」と思いましたが、「先生、外へ行きます」と言います。何しに行くのかとずっと

ついていきますと、自分が見つけた、二週間しか持たないその若葉色の木に行つて、そこに鳥の形をした葉の全てを取り付けたのです。一月以上、その木にだけ、若葉色がありました。よほど子どものほうがすごいと思います。ということ、恐らく本質的なことは、われわれが今までやってきたことを、その大きさをしっかりと自覚して、これからもまたそのことをやっていくことだろうと私は考えております。どうもありがとうございました。(拍手)

## 柴田 和豊先生 (元東京学芸大学) 美術教育の本質をめぐって

柴田です、どうぞよろしくお願ひします。奥村さんの話の中心は、やはり子ども自身の生み出す力と、それを教師や大人が何より大事にすべきだという、そういうお話であったかと思ひます。今日出てきた話になり圧倒されていますが、今の時代を動かしている人たちが、私とは異なるイマジネーションを持って、メディアやいろいろなところでお話されていることが分かりました。しかし、今の時代の混乱をどう治めるかということをめぐるっては、やはり

これまでの世界の根っこを振り返る必要があると思ひます。人間の世界のベースはいつも一種の原始性と結びついているのではないのでしょうか。例えば、難民問題の核心には、生物の命を継続させる条件、つまり食べるものがなければどうするのか、着るものがなければ寒い中でどうするのかというような変わらない問題が横たわつていふと思ひます。だから教育の本質を考え直そうとする時に、主に世界の新たな姿を前面に押し出す論調には距離を感じてしまひ

ます。私が今日持つてきたレジュメや資料は、そういう点では古い世界に多く関わるものです。古い時代のこととはこれから勉強・研究をしていく人たちにはやはり知つておいてほしいのです。知られずに過ぎていくとしたら残念です。

美術教育においても、狭い日本を出て外国へ行つて実践者・研究者として大きくなつていく人たちが少なからずいます。視野とイマジネーションが広がつてよいことです。しかし反面、日本の教育に対してあまりよく知らないという状態が出てきます。例えば美術教育の足跡についてはどうでしょう。美術教育「研究」には誇るものはそれほどないかもしれませんが、美術教育「実践」は誇つて

よいものです。

戦後日本の再出発にあたって、人間があらためて生き直すという中で美術教育はどうあるべきか、子どもたちが持っている力を発揮し後悔のない人生を送っていくために、大人たちは子どもたちをどう理解し、何をサポートすればいいかということについて実に熱のこもった議論が行われていました。そのことがあまり知られずに過ぎていくなら残念なことだと思っています。

## ■議論の下地は 存在してきたか

それでは今日の参考図版の中から生活画といわれる版画を見てくださ

い。その前にぜひ知っておいてほしいのは、生活を見つめるという美術教育が生み出した生活画にはもつと

いろいろな絵があったということですが。リアリズムの系譜のものだけでなく、すごく牧歌的な絵もありました。ですから、かつての美術教育者たちが絵を通して「生きる」ことに誠実に取り組んだことの一例として見てほしいのです。

次にこれはオットー・ディクス (Otto Dix 1891-1969) の作品『オットーディクス展 神奈川県立近代美術館ほか(一九八八)』です。関根正二でもムンクでもよかったのですが、オットー・ディクスをここに選んだのは、この男の子の不安のある表情のためです。不安は、教育を考

える上の重要な一つの柱になると思っています。

私は教師になることや、教育を語るということに関してすごく違和感を持つていた人間です。教育に対する嫌悪感さえありました。第一の理由は、常に明るい人間像しか語らないという教育の体質です。そのことは特に学習指導要領や文部行政などの大きな問題だと思っています。

教育は、問題を抱えてうまくいかない子どもが少なからずいながらも、片方では明るい人間像を一つの到達目標のように唱えます。うまくいってない人間からしますと、そのことは神経を逆なでにされているだけなのです。私のライフワークは、美術教育を考えるとときにそのような

違和感を解消していくことであったといつてよいでしょう。現在の美術教育の本質についての論議においてこのような視点は含まれているのでしょうか。明るい人間像とそうでない人間像を包括的に視野におく言説や行動はよく見聞きするものでしょうか。私の感じではあまりないように思えます。それらを出現させる背景や土壌がないように思えます。かつて戦後の民間美術教育運動が美術と教育をめぐって活発な議論を繰り広げていた時代には美術教育の多様な考え方(＝土壌)がありました。が、

今は学習指導要領の文言への一極集中でやせ細っているようです。

次に見ていただきたいのは、二〇一八年の二月一九日の「朝日

新聞朝刊 文化芸欄」の記事『美術館 いま社会活動の場』です。少し抜粋していますので、そちらで読んでみます。

「今、米国の状況は非常に難しい。政治的にも分断しています。その中でわれわれは何が重要なかを表現したい。何かを展示し、何かを展示しないという点で、美術館にはそもそも政治的な面がある。われわれは中立的ではない。政治色のない美術館はないんです。」

という具合です。これはいわば偏った、非常にくせがあるなどと考えられるような特殊な美術館の関係者が言っているわけではありません。い

わばワールドワイドに見て、ある意味最もオーソライズされる美術館の中から出てきています。これはどうなのかということです。私はこのシンポジウムに行けなかったのですが、いろいろな読み方ができます。なぜ森美術館だったのか、国公立の美術館でなかったのか。また、そもそも日本の美術館は、このような空気というものを持っているかどうかです。別に持つていなくてもいいという意見はあるでしょう。しかしここでは、美術と美術館が持つ政治性ということが正面から問われようとしています。ニューヨーク近代美術館のグレン・ラウリイさん達の間ではごく一般的なことなのかもしれません。それに対して、われわれの間では、一

般的とはいにくいのではないかと  
いうことです。

私も美術館の教育普及に協力する  
ことがあるのですが、その際に感じ  
る美術館の雰囲気は、美術教育が足  
場である私からしますと、けつして  
馴染みやすいものではありません。  
なぜなら、何より美術の良き・豊か  
さが強調されます。それに対し美術  
教育には美術と教育という柱があっ  
て、これをパラレルに議論しないこ  
とには美術教育という営みは現れて  
こないのです。

多くの美術館関係者にしてみれば、  
美術を語るだけで、そこには一つの  
意味深い世界が浮かび上がっている  
のでしょうか。それは、言うまでもな  
く美術が持っている何千年をもまた

に問い続けられていた証でしょう。  
ひるがえって今の美術を取り巻く状  
況が気になります。  
イズムの時代は思考にメリハリⅡ  
緊張感があつたのではないでしょう  
か。例えばある人は芸術の社会性を  
強調し、他の人は芸術の個の世界と  
しての性格を重視するというように、  
異なる視点が提起され、議論が議論  
を生み出す。その連鎖はイズムの多  
様さからしてダイナミックであつた  
と形容できるでしょう。それに対し、  
新自由主義隆盛後の社会の中では議  
論らしいものは見当たりません。豊  
かなのかそうでないのか定かでない  
現在の社会に広がる過剰な視覚的世  
界はなんとなく広がっている景色の  
ようなものかもしれません。私たち

ぐ歴史的な縦軸の豊かさ、また世界  
のいろいろな文化圏を貫く横軸の豊  
かさに支えられています。美術の豊  
かさが美術館を生み出しているの  
です。けれども美術教育は美術の豊か  
さを語るだけでは成立しない。教育  
とは一体何だろう、どのような視点  
で人間の成長をみるべきか、とい  
うような問いを省いては見えてこ  
ないのです。

「朝日新聞」のこの記事の大事さは、  
そういうことではこの国の美術館が  
価値の議論をもつと精力的にやらな  
いといけないということを教えてい  
るといつてよいでしょう。さらに読  
み替えを試みますと、「何を展示し、  
何を展示しないかという点がそもそ  
も政治的である」とすれば、「何を教

の主体的な意思などとは無関係に。  
一つの補足です。先述の諸イズム  
から受けた影響が大きいものであつ  
たことはいまでもありません。し  
かし同時に、日本近代にはそれら  
を生み出すプロセスが存在していな  
かつたことも明白です。ですから思  
想・思考を紡ぐ土壌の欠落は今に始  
まったことではないのです。

## ■近代と美術教育

次に書籍の紹介です。美術教育を  
深く広く考えたいという人に、項目  
だけでも、役に立つのがこの美学事  
典です。弘文堂が出したこの本は古  
いものですが、かつての美術教育に  
関わる歴史的な事柄、例えば「翰林

える、あるいは何を教えないかとい  
うこともそもそも政治的である」と  
なり得ます。美術教育の在り方に  
いてもあらためてそういうことの再  
確認は必要だと思えます。

## ■イズムの交錯と後退

議論の土壌があるのかどうかとい  
う点については、ヨーロッパ近代  
には豊かな足跡が残されています。  
一八〇〇年代の中ごろから一九〇〇  
年代前半にかけてイズムの氾濫とも  
いべき現象があつたのです。ロマ  
ン主義、象徴主義、印象主義、表現  
主義、構成主義、社会主義リアリズ  
ム等々というように。それらは芸術  
の在りよう・表現の意味などが真剣

図画院」や「七自由科」などを振り  
返るといようにスペインを長くとつ  
て項目を収録しています。さらに日  
本を代表する美学者の一人であつた  
山本正男が担当している部分をぜひ  
見て欲しく思っています。そこには、  
美術教育のいろいろな主張、考え方・  
イズムの違いが取り上げられていま  
す。例えば、美的教育論や情操教育  
論、創造教育論や個性教育論とい  
うようなことを項目に挙げて説明して  
います。惜しいのは、見出し語が近  
似しているように、また無理をして  
分離しているように思われる点があ  
ることです。しかし、美術教育には  
「いろいろな考え方があつた」という前  
提に立つその姿勢には学ぶべきこと  
が多いと考えます。考えの多様さが

希薄になりかねない現在だからこそ一読をお勧めします。

私がなぜ近代を重視するかといいますと、普通の人々が主役になるということ、その時代だからです。美術教育に関しても、かつては中世でもルネサンスでも工房が技術教育を施していました。技術的な専門教育以外はなかったといっても過言ではありません。それに対し近代になると、普通の人たちが普通にもつ感情、うれしい、楽しい、つらい、悲しい、寂しいなどが教育や芸術の中で居場所を持ち始めます。ロマン派の出現はそのことを端的に示していますし、もっと分かりやすくはゴッホやムンクの登場を想起して頂ければと思います。美術教育は、感性の存在を肯

つは、美術というものがどのような力・可能性を持っているかを分析していくことです。一般的に、教育は国や社会をこのようにしたいとか、子どもたちにこう育ってほしいというようなところから出発します。そして、それに向けて美術をどういふふうに教育方法として構成していくかということが必要になってきます。それらを考えることが美術教育論だといつてよいでしょう。

私は美術の教育的機能とは一体何なのかということはずっと考えてきました。しかしそれ以前に、教育と美術はそもそも親和的な関係にあるのだろうかという疑問を抱えています。教育は、人間にこうあるべき、こうなってほしいということを求め

定的に捉える近代の教育的・芸術的動向によって表現教育の基盤を手にすると見て間違いないでしょう。

科研の研究集会でありながら、私の話は常識的・初歩的過ぎるのかもかもしれません。埋め合わせに知的情報の一つ。レジュメにはシラーのことを挙げていますが、ぜひ『美的教育論』をお読みになることをお勧めします。なかなか難しく面白い本です。シラーは感性的世界をクローズアップします。しかしその後の表現主義のような感性の豊かさや自由さを諷刺あげるものではなく、理性と感性のせめぎ合いを見据え、いかに感性をコントロールするかということに心を砕きます。やはり一八世紀の人だったのです。ところでそれまでの

ます。それに対し、美術は必ずしもそのような脈絡で存在しているわけではないのです。

オットー・ディクスの作品を挙げましたが、それについても、暗く教育的には望ましくないといわれかねない。そうした傾向があることを示す作品例として持ってきたのです。そのようなことを下敷きにして、この美術と教育の親和点を求めてというところを捉えていただければと思います。

教育・学校を嫌うアーティストたちは多い、あるいは多かったと言わべきでしょうか。この頃では美術館からの美術教育への好意的アプローチも多いようですし、教育を敬遠せず応援しようとするアーティストも

時代の引力を思わせるこの過渡的な状態・一種の中途半端さゆえにシラーは今日性を持ち続けているのかもかもしれません。というのは、今の教育の中でも感性の居場所はやはり微妙ではないでしょうか。学習指導要領の中に感性への論及が見られるとしても、感性的に生きることや、感情的に表現するということは掛値なしに許容されているのか分かりかねます。疑問符をつけておきます。

## ■美術教育の構成要素

進んで美術教育の構成要素についてです。美術教育を考えると、この柱の一つは教育の目的は何かを考えてみることです。それともう一

多数います。以前ですと、大学の美術教育担当者と実技などの専門科目担当者には隔たりがあつたのですが、最近では後者が美術教育に積極的に関わろうとする空気が増えています。良い流れです。だとしても教育嫌いなアーティストが少なくなかったということはおさえておくべきでしょう。教育が語る教育理念や目標というものは、時代や社会の趨勢に流される面があり、都合のよいスローガンに堕しかねないことは戦前の歴史に刻まれています。優れた感性の持ち主であるアーティストがそのことに反応しないわけがないのです。

しかし大切なのは、教育と美術をそれら本来のよき姿で突き合わせることだと思えます。みなさんはそれ

らをどの地点で、どのような視角から関係づけるでしょうか。私が注目するのは、全方位というか、いわば良いところから悪いところまで人間の全ての局面を照らし出す美術の力です。快・不快、喜怒哀楽に関わる表現を美術は展開してきたのですが、それは人間の全体性と関わるものであり、そのことによって深い人間理解を可能としていくといつてよいでしょう。教育の課題と美術の力を関係付けて組み上げていくのが美術教育論の仕事だと思っています。

こう考えますと、今日最初に発表なさった山崎先生のアール・ブリュットの論考や和菓子の実践は多面的な視点をもつことの大切さを示すもので、よく考えられた美術教育実践で

しています。

他方こちらは対照的に意識的であることにこだわった作品です。一〇〜一二センチほどの大きくないバツジですが、今日お話しした生活版画の美術教育作品に通じるコンセプトをもつものと考えています。自分が生きていく世界を振り返り、社会や人々へのメッセージを込めているのです。それらは造形性とメッセージという内容性の二つの柱から成り立っています。近代以来の形式と内容の相関性はいまでも引き継がれる課題といつてよいでしょう。この実践に取り組んで分かったことは、愛すべき作品も少なくない一方、けっこう多くの学生からメッセージが出てこないことです。私としては、就職や人間関

あると思っています。聞いていて大変分かりやすかったです。

## ■実践への視線

少し実践紹介をさせてください。私は、教師生活の終わりの一〇年間は、ものを作る活動も講義科目の中に組み入れていました。それまではそういうことはやっていなかったのですが、美術教育の課題とはこういうように考えられると、今日のレジュメに書いているようなことをお話しした上で、だからこういうことが実際の活動として想定できるといふことを提案して、受講者と一緒に表現活動・ものづくりに取り組んでいました。

係に不安を抱えながら生きる若者たちから何らかの感情が漏れ出てもおかしくないと思うのですが、なかなかそうは行きません。いくつかの理由が思い浮かびます。このような教材が面白くも何ともないのかもしれないし、授業でたまたま出会っただけの老人に自分の内面を示す必要はないと思われても不思議ではないのです。ただ案じているのは、もつと根深く表すこと・表現することへの関心が一般的に薄らいでいるのかもしれないということ。自分の見方・感じ方を投げかけ、それに反応が生まれる。その繋がりが期待できなくなっているとすれば気がかりです。

もちろん他の活動の柱も設定して

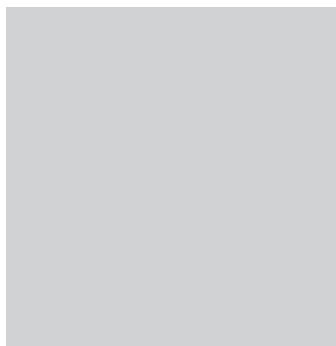
これなどはどのような作品かというところ「木工バンドはすぐ気持ちがいい」というだけの作品です。それ以上の哲学的や文学的な内容は何もここには込められていません。しかし、人間の知覚や行動の始まりに密着する作品としてその意味は意外に大きいのではと自賛しています。教育では、主体的や計画的に活動できるように導く、いいかえると意識の形成が到達点とされますが、みずみずしく反応する身体（感性が宿るところ）があつてこそ感じ・考える営みは立ち上がるはず。感情や意識のレベルの前に生理的に感じ取るレベルのあることは否定できない。そう考えるところから、身体・主に皮膚感覚から始まる活動を出発点と

います。主体的見取り図を示すと、「遊びのように楽しむ」「自分の感じを大切に」「自分の考えを伝える」「みんなの作品を楽しむ」「作品を生活に生かす」「もつ」といろいろな表現を」というような流れになります。人間という生き物の多面性を反映して、図工・美術は多面的な広がりをもつものであることは周知の通りです。

この作品はメールアドレスと呼ばれるもので、自分の作品を他の人たちに送り届けようとするものです。届ける方法は主に郵便です。いろんな材料と表現の仕方を楽しむ部分と、自分の表現を手立てにコミュニケーションを広げようとする意識が重なり合っています。ネットを介した交わりが一般的である中でアナログな

手法は新鮮です。

不手際で話の脈絡が乱れてきましたが、最後に粘土から作る作品をご覧ください。タイトルを付けるとしたら「ペットボトルにカラフルな小石がいつばい・音も出ます」といった具合でしょうか。本当は泥んこまみれになるようなスケール感のある活動に憧れるのですが、授業の制約に合わせて紙粘土をトイレットペーパーから作り、それから簡単な遊具の考案へと進んだ次第です。そのため、立派な造形物を作ることより粘土を自分の手で生み出すことを重視し、粘土で作る作品も小さな簡単なものでよく、抵抗なくたくさん作り出せるようにしています。紙粘土でお団子作りをし、乾いたら彩色し



作品 柴田和豊

ペットボトルに入れて振ってみる。作例の一つをリハビリのために私に話の機会を与えて下さった相田先生に差し上げようかと思っています。最後の一言です。いま世の中では勝ち組と負け組がはっきりしてきました。そのような中を子どもがどう生きていくかを考えますと、子供たちの発語、それをどういうように美術教育が後押ししていくかがとても大切だと思います。この変わること

のない課題に向けて、遊びから意識まで突き抜ける活動を考え続けたいと思っています。(拍手)